大阪天満宮社報　第50号

てんまてんじん

生田花朝「鳳神輿船渡御」

松浦武四郎の天神信仰……2頁
装束賜式を齋行……4頁
近江八幡から青葦奉納……5頁
伊万里染付燈籠……6頁
屏風に描かれた天満宮……8頁
天満天神繁昌亭　上棟祭……10頁

源風進上

平成十八年　盛夏

松浦武四郎の天神信仰
―大阪天満宮奉納大神鏡を訪ねて―

松浦武四郎記念館
学芸員　山本　命（めい）

◆百三十kgの大神鏡

平成十八年六月二十六日、三重県から私を含む十四名（地元の公民館サークル「武四郎を読む」会員など）が大阪天満宮を訪問させていただいた。

一番の目的は、松浦武四郎が明治十二年（一八七九）五月五日⑴に奉納した大神鏡の拝観である。銅を鋳造した大神鏡は直径一m、重さは約百三十kgもある大変大きなもので、鏡背（姿を映す鏡面が表なので裏側）には、海を表す文様「青海波」と、波間に浮かぶ樺太、千島列島を含む日本列島の図、そして、

天満神のこころのかしこさを
　この神鏡の光にもしれ

と武四郎自身が詠んだ和歌が刻まれている。

その他に奉納者「松浦武四郎　阿倍弘⑵、鋳造年月「明治十二年一月吉日」、神鏡の作成者「山城国住城国住　金森弥輔作」、奉納にあたり協力をした、「幹事　西京　冨岡百錬、同　秦蔵六、同　山田茂平、同　益田友雄⑶」の名が刻まれる。

拝観をさせていただくと、大阪大空襲の戦火による熱を受けているため、上部がやや変形しているものの、梅花図を彫刻した木製の台座（「京都前川清光」「大吉」の印影が刻まれる）に置かれ、奉納当時の姿を偲ぶことができる。

◆三重県の三大偉人

松浦武四郎（一八一八～一八八八）は三重県松阪市（旧三雲町）の出身で、幕末期に六度に及ぶ蝦夷地の探査をアイヌ民族の協力を得ておこない、詳細な記録と地図を出版している。また、明治政府では開拓使の判官を務め、北海道の道名、支庁名、郡名の撰定に尽力した人物である。

三重県では、俳人松尾芭蕉、国学者本居宣長と並んで、三重県三大偉人の一人に数えるが、彼の活動は探検家に留まらず、作家、出版者、学者など多岐にわたり、天神信仰においても異彩を放っている。

◆各地の天満宮に奉納

武四郎は、明治八年（一八七五）に北野天満宮、明治九年に上野東照宮、明治十二年に大阪天満宮、明治十三年に金峯山神社、明治十五年に太宰府天満宮へ大神鏡（鏡背のデザインはそれぞれ異なる）を奉納したほか、明治十六から十八年にかけて菅原道真公ゆかりの二十五社の天満宮に、直径約二十五cmの小神鏡と、高さ約一m、横と奥行がともに約十七cmの石標の奉納を、賛同者とともにおこなっている。

その後、明治十九年には二十五社の天満宮と道真公の伝説を双六形式で紹介した「聖跡二十五霊社順拝双六」を出版し、菅原道真公の紹介に努めている。

大阪天満宮には、白銅製の小神鏡も奉納されており、背面には「聖跡第十番　天満天神宝前　願主　東京風月堂清白」⑷と刻まれている。

また、あわせて石標も奉納されていたと考えられるが、大阪大空襲の際に焼失したのか、境内にその姿を確認することはできない。しかし、他の天満宮に残る石標から推測すると、正面に「聖跡第十番　天満天神宝前　揮毫［賛同者名］」、側面に「発起人　東京　松浦武四郎」と刻まれていると考えられ、今後発見されることを願うばかりである。

◆おわりに

なお、大神鏡は平成十三年までは拝殿に安置されていたが、菅原道真公の御神忌一千百年にあたる拝殿改修の際、かなりの重さと大きさであるため、現在は地車倉庫にて保管されている。拝観にあたり、大阪天満宮の柳野権禰宜、同宮文化研究所の近江晴子様には格別のご高配をいただいた。記して感謝を申し上げるとともに、武四郎の天神信仰をみなさまに知っていただければと思う。

注

⑴大阪天満宮の明治十二年当時の社務所日誌に記されている。武四郎の記録「己卯紀行」には、奉納の様子が詳しく記されており、道真公の御威光が全国に満ち、国家の平安とアイヌ民族の幸福を願うためのものであったことがわかる。

⑵武四郎は幼名を竹四郎（のち武四郎）、諱を弘（ひろむ）という。武四郎の松浦家は、中世に水軍として活躍した「松浦（まつら）党」の出とされ、前九年の役（一〇五一～六二）で敗れた安倍宗任を祖とすることから、ここでは安倍（阿倍）姓をあわせて名乗っている。

⑶冨岡百錬＝文人画の巨匠冨岡鉄斎。秦蔵六＝新政府の依頼で御璽・国璽を作成した金工家。山田茂平＝不名。益田友雄＝彫金家加納夏雄の弟子で明治新貨幣の金型を制作

⑷小神鏡は武四郎と交流があり、賛同した人びとが願主となって奉納されている。菓子屋で知られる東京風月堂は、初代が大阪の出身であり、前身が「大坂屋」であったことにちなんで大阪天満宮奉納の願主となったのであろうか。

松浦武四郎記念館
〒五一五-二一〇九
三重県松阪市小野江町三八三
TEL〇五九八-五六-六八四七

表紙解説

生田花朝「鳳神輿船渡御」

生田花朝（いくた・かちょう）は、近代大阪を代表的する女性画家である。明治二十二年（一八八九）に、現在の天王寺区上之宮町に生まれ、菅楯彦、次いで北野恒富に日本画を学んだ。

大正十五年（一九二六）の第七回帝展に出品した「浪花天神祭」が特選となり、画壇に地位を築いた。花朝自身が、晩年に「今の私があるのは天神さまのおかげです」と懐古したように、天神祭は花朝にとって最も重要なモチーフだった。

現在十点近い天神祭の絵が知られており、当宮にも数点を収蔵している。そのうちの一点は、この九月十五日に柿（こけら）落としを迎える落語定席「天満天神繁昌亭」の緞帳（どんちょう）にも採用される。

ここに紹介する色紙は、鳳神輿の奉安船を、江戸時代の風俗で描いたものである。

（追記）昨十七年十月二十二日に、この色紙を奉納頂きました御鳳輦講の板東武夫様は、本年三月十八日に帰幽されました。ご冥福をお祈りいたします。

天神祭『装束賜式』齋行

神童など六名に装束を

天神祭を一ヵ月後にひかえた六月二十五日、恒例の装束賜式（しょうぞくたばりしき）が大阪天満宮の参集殿大広間で執行されました。

毎年の天神祭を齋行するにあたって、「神童」および「猿田彦」「随身」「牛曳童児」の重要な所役を御奉仕頂く六名の方々に、宮司から当日着用する装束をお渡しし、委嘱状を交付授与して、親しく御願い申し上げる儀式です。

これに関係する講社は、神童と猿田彦を預かる「西天満連合神鉾講」、随身を預かる「御鳳輦講」、牛曳童児を預かる「福梅講」の三講社です。三講社では、三月頃からこれらのお役を勤めて頂けるかたを選定して、五月末日頃には大阪天満宮に対して推挙状を提出されます。これをうけて当宮では本格的に祭儀の諸準備が始まるわけです。

では、これらの所役にどのようなかたが推挙されるかといいますと、まず「神童」は、鉾流神事を主幹される神鉾講が、地元の西天満小学校の五、六年生の男子のなかから、菅公御幼少の砌（みぎり）を彷彿させるような、聡明利発な児童を選定する仕来りになっています。

また「猿田彦」は、波多野肇氏が毎年継続してお勤めになられます。御祖父の後を継承されてから、昨平成十七年で三十回目の御奉仕となり、記念の祝賀会が宮司も列席して盛大に催されたのでした。

「随身」は、御鳳輦を警護するお役ですから、容姿端正な若者が推挙されますし、御神牛の綱を執る「童児」は、清楚で可愛い児童が選ばれることが多いようです。

装束賜式の次第

装束賜式の当日は、まず「神童自宅清祓式」から始まります。午前九時、大阪天満宮の神職が出向し、寺井種治権宮司、神鉾講講長以下の参列のもと、神童に選ばれた栗巣慎也君の自宅に設けられた祭壇の前で、清祓式が齋行され、家内すべてが清められました。

その後、正午にはその他のお役に推挙された五名の方々と家族の方、また三講社の皆さんが天神祭当日の装束で参集し、大広間にずらりと並べられた装束の前に勢揃いしました。

初めに宮司からお役に就かれるお一人お一人に委嘱状を授与申し上げ、続いて御願いの挨拶を申し上げました。次に祭務部長の岸本禰宜から斎戒について説明があり、この後、すぐに各自の装束を着装して記念の集合写真を撮影しました。

引き続いて一同は「社参之儀」のために本殿に参進し、大前に補任の報告を行うとともに、無事に御奉仕が叶うよう祈願を申し上げました。

この後、一同は着替えの後、天満宮会館にて直会（なおらい）之儀を行い、神鉾講の野村講長の祝辞に続いて、御鳳輦講の田中講元の乾杯の発声にて開宴となり、お役就任をお祝いしました。各テーブルで祭り談義が花咲いて、福梅講の宗石講元の音頭により、恒例の「大阪締め」の手締めが納められてめでたくお開きとなりました。

最後に、今年御奉仕の方々を御紹介いたします。写真一列目右より、牛曳童児、岩倉弘幸。随身、樽野三郎。神童、栗巣慎也。宮司、寺井種伯。猿田彦、波多野肇。随身、広瀬裕士。牛曳童児、菅崎真由。

近江八幡和船観光組合

天神祭用 青葦奉納

琵琶湖の青葦奉納

七月十五日に滋賀県近江八幡市の和船観光組合から、琵琶湖の一部である西ノ湖産の青葦（あおよし）が奉納されました。これは天神祭の鉾流神事や表大門に設置される「茅ノ輪（ちのわ）」を作る用材となるものです。同組合からの奉納は、平成十年に始まりましたから、今年で九年目になります。

当日は大阪天満宮の神職が、近江八幡市の和船観光組合の乗船場まで出向し、まず現地に祀られてある「蘆大竜神（よしのだいりゅうじん）」の神前にて奉納奉告祭を齋行、道中の無事を祈願した後、この日の早朝から組合員によって刈り集められた青葦が祓い清められました。

そして神職の車が先導して一路大阪へ出発、約二時間かかって大阪天満宮に到着し、ただちに本殿にみずみずしい青葦が供えられ奉納式が執り行われました。同組合からは福永文昭理事長はじめ五名の組合員に同行参列していただくことができました。

亡き父に代わって

この日は丁度、同組合と当宮の架け橋となられた㈱伴ピーアールの伴一郎社長も同行列席されましたが、当時の理事長は福永氏の父である福永武（たけし）氏でしたが、当初は伴社長と武氏の間で奉納の相談が成立し準備を進めていたのでした。

そうした矢先の五月十四日になって武氏が不慮の事故に遭われて、急逝されるという事態になってしまいました。しかし御子息である文昭氏は亡き父上の御遺志を継いで奉納することを決意され、組合員の皆さんの協力を得て立派に奉納を成功させたのでした。

以来毎年欠かさず御奉納を頂いているのですが、皆さんにご覧頂けるのは表大門に掛けられる大茅ノ輪でしょう。他には鉾流神事で鉾とともに河中に投じられる菰包みと茅ノ輪ですが、これはその時限りのものですから御参列くださいませんとご覧になれません。

福永氏の奉納を受けて以来、大阪天満宮では葦の茅ノ輪にしているわけですが、神社以外の多くの方面から取材や問い合わせが寄せられるようになり、だんだんと葦の茅ノ輪の輪が広まってきたように思います。

葦の浄化作用

茅ノ輪はもともと茅萱を用いるのが本義とされますが、地方によっては古くから葦をつかうところもあるようです。葦や茅萱などの水生植物が水の浄化能力に優れていることを経験的に知っていた古代の人々は、この作用によって心身の浄化にも効果があるのではないかとの信仰を持つようになり、やがて「大祓神事」へと発展していったのでしょう。

天神祭は夏越の祓いの要素を色濃く残している祭儀であり、青葦の茅ノ輪や祓いの具は非常に重要な神事用品ですから、これらのすべては神職の手によって毎年調製されています。このことをよく知っておられる氏子さんは参拝のあとで表大門の茅ノ輪から葦の葉を一枚持ち帰って厄除けにされているとお聞きします。花火もきれいですが、大茅ノ輪をくぐって境内に参拝し、身も心もきれいになられてはいかがでしょうか。

本社瑞垣内

伊万里染付燈籠が結ぶ縁（えにし）

淀川キリスト教病院 前院長　辻本嘉助

今から三年前（平成十五年、二〇〇三年）の事です。興味本位で私は父方の祖父「辻本嘉三郎」をインターネットで検索してみました。祖父は五十七年も前に他界していますので、検索されることはないと思っていたのですが、意外にも一件検索されました。それがなんと、大阪天満宮社報「てんまてんじん」第四〇号（平成十三年七月発行）の大阪天満宮「境内散歩」⑯「伊万里染付燈籠」の記事で、明治十五年に奉納された伊万里焼燈籠の台座石に、奉納者の一人として祖父の名が刻銘されているというものでした。

祖父は明治三十八年（一九〇五年）、三十一歳のとき、当時の朝鮮京城（現在の韓国ソウル）に食料品市場の開設にあたり天満市場から推されて京城に移り住みました。それで、父嘉一も私も、朝鮮の京城で生まれました。祖父は京城の南大門市場で食料品の大きな問屋を経営していました。昭和二十年、私が国民学校二年生の夏に我が国は大東亜戦争に敗れ、私たちは家屋・財産すべてを放棄して裸一貫、大阪に引き揚げてきました。祖父はその頃すでに中風を患って、後妻の郷里京都で昭和二十四年に失意のうちに他界しました。私は、母の生家のあった西区江戸堀を経て、中学から高校時代にかけて、北区此花町一丁目（現天神橋一丁目七）の父が祖父から相続した土地に住みました。この頃、私は両親から祖父が朝鮮に渡る前は天満の乾物商人だったことを聞きました。そのために、この燈籠の台座に「辻本嘉三郎」の名前があることを知った時、それは祖父だと直感しました。

この燈籠に祖父の名があることを、戦前京城で辻本商店の支配人として祖父を助けた神藤永治郎氏の孫で、現在も親しくしている神藤雅晴氏に伝えたところ、神藤氏は幸いにも大阪天満宮の氏子でしたので、天満宮に取り次いでくださり、この燈籠を見せていただくことになりました。

そこで、その翌年の十月十九日の朝、生憎雨天でしたが、私は弟嘉秀を伴って、神藤氏と天満宮を訪れました。私共の燈籠拝観に際して、社報「てんまてんじん」に「この燈籠の奉納者についてご教示くださった」と記されている御鳳輦講の講元上野誠三郎氏ほか家近勅氏、河合清司氏も参加して下さいました。

そこで先ずは昇殿の上、一同御祓いを受けたのち、小雨降る中、柳野権禰宜の先導で瑞垣内に入り、目指す燈籠に案内していただきました。

「伊万里染付燈籠」は、瑞垣内、本殿の真後ろに東西一対、金網の囲いの内にありました。明治・大正・昭和・平成の百二十二年間、風雪と暑気に耐えてその美しさを今日に留めていました。その東側の燈籠の台座石に確かに「辻本嘉三郎」の名を読み取ることができました。その燈籠

朝鮮京城神社の祭礼に奉仕する辻本嘉三郎さん

伊万里燈籠と辻本嘉助さん

を前にして、長い年月の隔てを超えて祖父に再会することが出来たような大きな感動を覚えました。もし故人となった祖父母や両親、父の妹が生きてこの度のことを知ったなら、どんなにか喜んだことでしょう。また、上野氏のご祖父上野嘉七氏の名前も台座石に刻銘されており、燈籠奉納者の孫たちが夫々の祖父ゆかりの燈籠の前で出会うというのも奇遇でした。

ところで、この燈籠は明治十五年に奉納されたということです。祖父は明治七年生まれですから、奉納の時はわずか八歳ということになります。八歳の子供が、このような大がかりな奉納に名を連ねることは、現代では考えにくいことです。しかし、祖父の場合はそれが可能な事情がありました。祖父は生まれたときは、辻本姓ではなく村岡姓でした。祖父嘉三郎は天満の乾物商人村岡嘉助・ふさの次男として生まれました。私の父によると、長男でない祖父は、辻本家に嫁いだ大伯母たけに子供がなかったので、辻本家の養子となりました。養母は大伯母ですから嘉三郎と養父母とは相当な歳のひらきがあって、養父宗兵衛は明治十一年に他界しました。そこで養母は辻本家の跡取りの辻本嘉三郎の名で、燈籠の奉納に加わったと考えるならば、燈籠の台座石にある「辻本嘉三郎」は私の祖父であって不思議ではないでしょう。ちなみに養母も奉納の翌年七十四歳で他界しました。

この度のことには、嘉三郎のことを裏付ける後日談があります。前述の上野誠三郎氏はこのあと一冊の本を私にくださいました。それは昭和八年に刊行された『大阪乾物商誌』で、それを見ると、明治六年十一月「組合申合規則」制定の際の連印者のなかに、仲買業五十六番に祖父の父村岡嘉助（市之町）の名があり、同じページの「鑑札下付後の開業者」（明治十八年十二月までの加入者）の中に「仲買？」として、辻本嘉三郎（河内町一丁目）の名もありました。何故「？」が付いているのか。明治十八年は祖父が弱冠十一歳だったからかもしれません。

また、明治三十一年一月五日現在の大阪乾物商組合人名の中に、村岡嘉助の長男、祖父の長兄村岡嘉一郎（河内町壱丁目）の名もありました。

また乾物商入札組規約（明治二十六年一月六日制定）の調印者のなかに辻本嘉三郎の名があり、大正九年十一月二十二日にこの大阪乾物商入札組の三十周年記念式典が天満宮において荘厳に行われたとあり、その記念の集合写真の中に、嘉三郎の顔を見つけました。このとき祖父は、遠路京城から駆けつけたと思われます。

この乾物商誌には明治二十七年に住吉神社に大燈籠を献燈した記事があり、その費用寄付者のなかにも、辻本嘉三郎の名がありました。祖父が二十歳のときです。

朝鮮に渡った祖父が京城神社の祭礼で氏子総代を務めたことも聞いており、祖父のこうした神社信仰は大伯母の影響大なるものがあったと想像します。私の両親の結婚式（昭和十一年）の式場が大阪天満宮であったのも頷けます。

以上、私事で恐縮ですが、インターネットが取り持つ縁で、祖父の天満宮と天満にまつわる足跡に思いを馳せることができたのはまことに幸いでした。

この機会を与えてくださった大阪天満宮の方々と上野氏、家近氏、河合氏、神藤氏に心より感謝いたします。

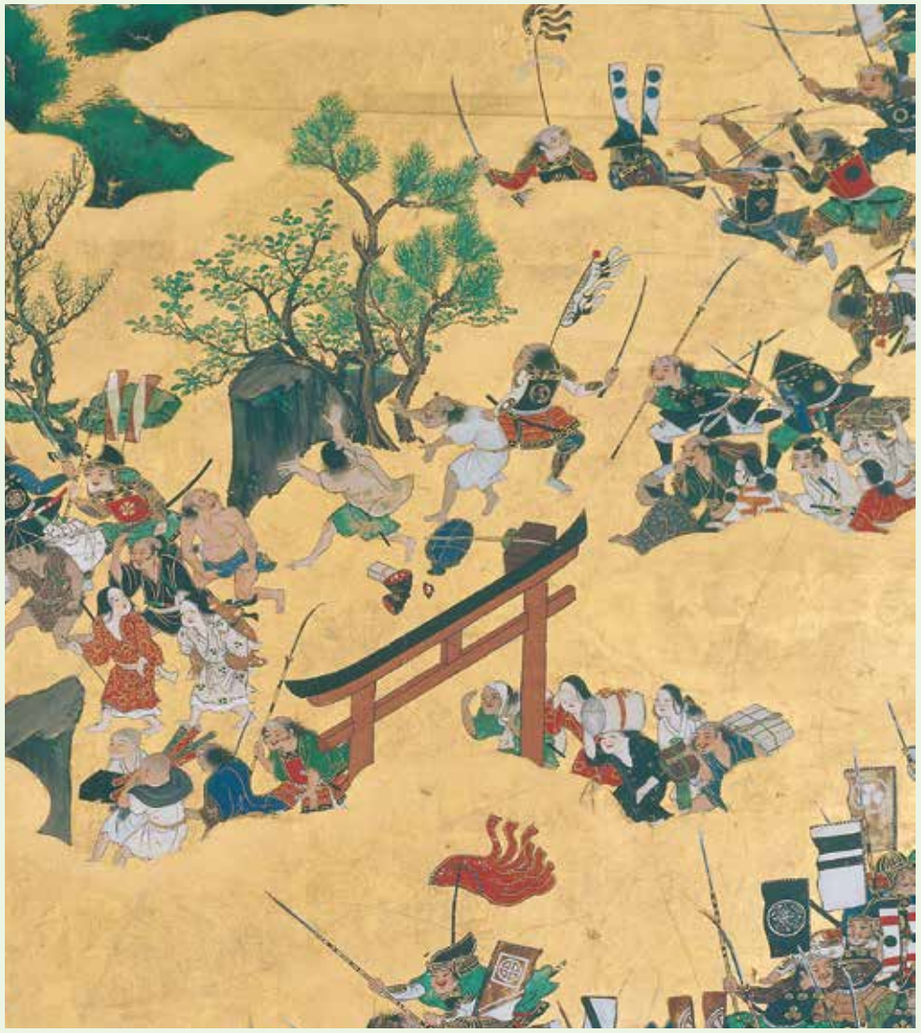
伊万里燈籠前に集う皆さん　左より辻本嘉助氏・上野誠三郎氏
神藤雅晴氏・家近勅氏・辻本嘉秀氏・河合清司氏

屏風に描かれた大阪天満宮
―天満のランドマーク―

江戸時代から現代に至るまで、当宮を描いた書籍・絵画は数え切れません。当宮そのものを描いたものだけではなく、天神祭を題材とした絵画に当宮が登場するのは当然なのですが、視野を大阪全域や京阪地域に広げた構図においても、天満宮は必ずといっていいほど描き込まれているのです。ここでは、上質の三点の屏風をご紹介しましょう。

三点ともに、共通するのは、天満宮を描くことにより、その付近が「天満」であると表現していることです。まさに当宮は、天満のランドマーク（landmark）だったのです。

※ランドマークとは、本来は船の航行や旅人にとって陸上の目印となるものをいいましたが、やがて、その地をその地と認識させる歴史的な建物などを意味するようになります。



①「大坂夏の陣図屏風」部分
（六曲一双、大阪城天守閣蔵、重要文化財）

元和元年（一六一五）の大坂夏の陣の戦後まもなくに描かれました。右手に応神天皇陵・住吉大社、左手に石清水八幡宮を展望する広角の構図ですが、金雲の合間に天満宮の鳥居が見えます。傍に松と梅を描くことにより、天満宮の鳥居であることを表現し、その結果、この辺りが天満であることを示しているのです。天満宮も戦火に見舞われ、逃げまどう庶民や、略奪する兵士が描かれています。

②「浪華名所図屏風」部分
（八曲一双、湯木美術館蔵、大阪市指定文化財）

十七世紀末ころの作品。右隻に道頓堀・四天王寺・住吉などを描き、左隻には大川沿いに上町・天満・船場・西船場から中之島を経て川口までを描いています。天神橋北詰にみえる当宮境内は参詣者で賑わい、それを相手に物売りが出て、三味線や鼓で演奏する姿も見えます。

当宮御祭神の正式名である「天満大自在天神」から「天満」の地名が生まれたことは周知ですが、絵画においても、「天満宮」は「天満」の象徴だったことが判ります。

今後、京阪地域を描く絵画をご覧になる機会がありましたら、ぜひ「天満」をお探し下さい。そこには鳥居が、いや、「鳥居」があれば、そこが「天満」なのです。

（文化研究所　高島幸次）

③「京・大坂図屏風」部分（六曲一双、サントリー美術館蔵）

十八世紀初頭の制作と推測されています。左隻に琵琶湖や京都、右隻では堺まで眺望する、実に広い地域を描いた屏風です。天神橋を北へ渡った所だけ金雲が開いて、赤い鳥居が覗いています。子に手を引かれた母親が、今まさに参詣しようとしています。

天満天神繁盛亭 上棟祭

本義に忠実な上棟祭を

昨年十二月一日に、当宮北側所有地で地鎮祭を済ませた天満天神繁昌亭は、五月八日には上棟祭を齋行し、工事も一段と慌ただしくなってきました。

施主である上方落語協会の桂三枝会長からは、上棟祭について「広報や協賛募財の観点からも、竣工、開館に繋がる重要な節目として、特に厳粛にかつ盛大に挙行したい」というご希望が伝えられました。

そこで、本義に忠実な上棟祭を齋行すべく、まずは過去の記録などの資料を収集することから始め、式次第の組立て祭器具、儀式工具の調達などを進めました。

また、設計者の狩野忠正氏と、施工会社の銭高組大阪支社の協力を得ながら、神職と、祭儀に奉仕される方々との習礼（打ち合わせ）を幾度となく繰り返し、近年には珍しい正式な神事とすることができたのです。

本殿にて「奉告祭」

上棟祭の「奉告祭」は本殿で、「建前之儀」は建設現場で行いました。

まず本殿では、大阪天満宮を代表して寺井種治権宮司、施主を代表して桂三枝会長、開設準備委員会代表で天神橋筋商店連合会会長の土居年樹氏など関係者が多数参列するなか、祭典奉仕の神職・巫女と、番匠役の狩野忠正氏、工匠役の銭高組大阪支社の社員二名が、古式の装束に身を包んで厳粛な面持ちで参進しました。

修祓の後、大前には神饌が供進され、続いて大棟に納められる棟札が献進されました。斎主の祝詞奏上に続いて神楽が舞われ、斎主拝礼の後寺井権宮司以下参列員代表による拝礼がありました。

神饌を撤した後、斎主以下参列員一同は列次を整えて、建設現場内の斎庭へ参進しました。

建設現場にて「建前之儀」

斎主以下、奉仕員、参列員が列候したところで、まず「奉幣並びに散供之儀」「祓詞奏上」を行い、大麻、切麻による「清祓之儀」によって建物すべてが清められました。

そして、上棟祭の中心部分である「工匠式」に移ります。「曳き綱之儀」は、左右の曳き綱に奉仕員参列員が手を添えて構えたところに、番匠役の掛け声も勇ましく「エイ、エイ、エーイ」と棟木を引き揚げる所作が行われました。

「槌打ち之儀」では、工匠役二名の声とともに槌音高く響きわたりました。続いて神職による「鳴く弦之儀」、工匠役による「散餅、散銭之儀」が行われ、最後に斎主から施主、施工へと棟札が手渡され、無事に上棟の式は終了したのです。

記念撮影のあと、振る舞い行事として落語協会から「大入り袋」が一般の参列者に授与されました。この後、斎主以下、参列員は梅花殿において「直会之儀」を行い、全員で御神酒を拝戴しました。席上、桂三枝会長の挨拶、寺井権宮司の挨拶があって、諸儀滞りなく終了したのです。

この後、工事も順調に進み、八月に竣工、九月九・十日にはプレオープン公演、九月十五日から二十四日までは「こけらおとし公演」を開催する見通しとなりました。

ぜひ御参拝の上ご来館くださいますようお勧めいたします。

戦前最後の船渡御（昭和十二年）
戦後最初の船渡御（昭和二十四年）を拝見しました

昭和十二年
戦前最後の船渡御

昭和十二年七月二十五日夕刻、若松町浜（現在の鉾流神事斎場）から出航された船渡御船列は例年のように堂島川を下り、中之島の西端をまわって木津川へ入り、江之子島の西岸から上陸されました。それから陸渡御列となり、江之子島を南下して大渉橋を渡り、松島御旅所（現千代崎の御旅所）へ向かわれました。江之子島上陸の様子をしっかりと拝見されたのが、現在も江之子島にお住まいの木村正子さんです。木村さんは、昭和三年生まれの七十七歳。昭和十二年当時は小学校三年生でした。木村さんのご実家は薩摩堀にあり、江之子島には仲良しのお友達のお家（うち）があって、毎年天神祭には遊びに行き、松島へ向かわれる華やかな行列を友達といっしょにわくわくしながらお迎えし、お見送りされたそうです。「あのころ木津川の水はきれいで、うなぎもとれました。江之子島に到着された人々が、陸渡御出発を待つ間に、船の舳先から次々に川へ飛び込まれました。あたり一面篝火であかあかと照らされ、それは見事な眺めでした」ということです。

昭和十二年の「本殿詰所日誌」には「満潮増水ノ為、鳳神輿玉神輿ハ中央市場荷揚場へ御上陸」とあり、渡御列の内、神輿二基はおそらく、江之子島を通らずに川口から松島御旅所へ向かわれたと思われます。しかもこの年は「帰路、昭和橋ニテ鳳神輿大破ス」というおまけまでつきました。

木村さんは、昭和二十年に大手前高女を卒業され、戦後、縁あって江之子島の木村家（大正三年に建てられたすてきな木造洋館）に嫁がれたのですが、大好きな天神祭船渡御の船列が再び木津川へ入ってこられることはありませんでした。

木村正子さん

昭和二十四年
戦後最初の船渡御

昭和十三年から十一年間中止されていた船渡御が復活したのは昭和二十四年のことでした。この年は福島の中央市場に臨時の御旅所を設け、船渡御を斎行しました。そのとき御鳳輦は中之島六丁目の堂島川左岸、当時の大阪逓信局の建物の前へ上陸されました。当時、大阪逓信局（現在の中之島センタービルのところ）に勤務されていた尾形貞延さん（枚方市にお住まい）がちょうど拝見されたのです。今年九十歳の尾形さんはその光景を鮮明に覚えておられます。「今の華やかな船渡御とくらべたらそれはひっそりとしたものでした。逓信局の前へ上陸された渡御列は上船津橋を渡って、中央市場の方へ向かわれました」とのことです。

堂島川を下る船渡御はこの年で最後となり、昭和二十八年に再び復活したときは、大川を遡航する船渡御に切替えられ、今日に至っています。

①大阪逓信局の場所　②「天満宮神幸御上陸地」の石碑の場所
③木村正子さんが渡御を拝見された場所

②石碑「天満宮神幸御上陸地」

浪速菅廟吟社詠草

雪稜　松村曉二撰

二月席題「春寒雪意」分韻

得魚　鐵鳳　安東勝幸

春寒午下歩郊墟　欲雪天公未雪間
此日此時如子夜　清閑案句素心舒

（訓読）春寒の午下　郊墟を歩し
雪らさんと欲す天公　未だ雪らずの
間　此の日此の時　子夜の如く　清
閑句を案じ　素心を舒ぶ
（語釈）郊墟＝野や山または田舎。雪
＝漢詩文では降るとも読める。此処
ではふる。子夜＝子の刻。午前十二
時ごろ。清閑＝清らかで静かなこと。
素心＝素直な心。
（詩意）春寒の昼下がり田舎道を散歩
している、天の神様は村里に雪を降
らしそうでいてまだ降らさない。今
日の此の空模様は真夜中の如くであ
り、この静けさのなかで自分の正直
な心持ちをと詩句を考えている。

三月課題「史跡探訪」

生菖　氏野往子

延元陵下樹間鶯　渡谷回山信意行
遺恨南朝尋史話　詠詩四顧翠煙横

（訓読）延元陵下　樹間の鶯　谷を渡
り山を回り意に信せて行く　遺恨な
り南朝　史話を尋ね　詩を詠じ四顧
すれば　翠煙横たわる
（語釈）延元陵＝後醍醐天皇陵。南朝
＝吉野朝。
（詩意）延元陵の辺は樹木のそこここ
で鶯の声がする。私は谷を渡ったた
り、山を回ったり、意にまかせて歩
く。それは恨み多い南朝の史話を尋
ねるため、そして芳野三絶の漢詩な
どを詠じ、四方を見てみると山の気
が靄のように漂っていた。

四月課題「春夜聴雨」

傚水　上田清文

山色生生喜再過　今昔雅賞興如何
尋詩啜茗夜窓下　聴雨聴風春思多

（訓読）山色生生　再び過ぐるを喜ぶ
今昔の雅賞　興如何　詩を尋ね茗を
啜る　夜窓の下　雨を聴き風を聴き
て　春思多し
（詩意）山が生々としてきたのは再び
雨が過ぎたこと、今も昔も春雨を良
いものとして見てきた。詩をよんだ
りお茶を啜ったりする夜の窓辺、雨
の音も風の音も春の来ること多きを
知りるのである。

六月席題「緑陰讀書」分韻

得元　芳水　荒瀧宏一

素衣如染緑陰繁　享受清風午下軒
獨誦詩篇凭一榻　人間至樂此中存

（訓読）素衣染めるが如く緑陰繁し
清風を享受す　午下の軒　独り誦す
詩篇　一榻に凭り　人間の至樂　此
中に存す
（語釈）素衣＝白い衣。民間人を云う。
（詩意）緑が民間人である私の衣を染
めるような樹陰。清風をひとしく享
受できる昼下がりの軒。私は独り椅
子に腰をかけ詩を声を出して読む、
人間の世の本当の楽しみはこんな中
にあるのだと気づくのである。

大阪天満宮献詠　風月社

平成十八年上半期秀歌

長文の手紙はうれしくり返し
くり返し讀み筆者を想ふ
顧問　關　俊一

故里の友の手紙はみな無事と
梅一輪の押花添へて
選者　淺井與四郎

巻手紙みやびごころもそへられて
水莖ゆたけき友の人柄
幹事　佐野秀子

光堂めざし踏みしむ月見坂
春曉きのうたかたの夢
幹事　友岡美佐子

若竹煮のほのかな香り春を呼び
母を偲びて和む食卓
東大阪市　宝藏寺京子

吾が林泉（しま）に若竹の香のたちわたり
心おだひに風もさゆらく
西宮　牛田眞理子

子等はみなはばたき行きて姥獨り
山家に遠き雲眺めゐつ
高知　三本さとる

遠山に花の咲くごと白き雲
雪とも見えて架かり流るる
京都　塩小路淳子

八代市立博物館未来の森ミュージアム特別展覧会

西山宗因生誕四〇〇年記念

宗因から芭蕉まで

当宮所蔵西山宗因自筆本などを出品

平成十八年四月二十一日から五月二十八日まで、熊本県八代市立博物館未来の森ミュージアムにおいて、特別展覧会「宗因から芭蕉へ」が開催されました。昨年秋に開催された伊丹・柿衛文庫の特別展覧会「宗因から芭蕉へ」につづく展覧会です。

西山宗因（一六〇五～八二）は、肥後熊本に生まれ、八代城代加藤正方に仕え、青年期を八代で過ごしました。その後は連歌師として有名になり、四十三歳で大阪天満宮連歌所の宗匠として迎えられました。また俳諧師としても「談林派」といわれる新風をおこし、井原西鶴や松尾芭蕉に多大な影響を与えました。今回の特別展で、八代が育てた近世文芸のスター西山宗因の里帰りが実現し、多くの八代市民、小学校の生徒さんから中学・高校の学生さんたちが訪れ、大好評だったそうです。

当宮から出品し展観されたものは次のとおりです。

一　『素丹句集』
二　宗春筆『正方・宗因両吟千句』
三　宗因筆『風庵懐旧千句』
四　宗因筆『昌琢発句集』
五　宗因筆『宗因発句帳』
六　『万句発句帳』
七　宗珍筆向栄庵文庫『什物目録』
八　滋岡長昌筆『連歌書籍目録』
九　『十花千句』
十　宗因筆『小倉千句』
十一　宗因筆『桜御所千句』
十二　連歌所懸額

八代市立博物館で開かれた展覧会風景

花咲ける春のあしたに亡き母の
ゆめ見嬉しもなやみ消え去る
幹事　森本美也子

亡き母のユーモアあふるる手紙には
少し長生きしすぎとありき
大阪　永田民子

このやうなときに電話をするなかれ
荒川選手が滑りをるのに
八尾　松村曉二

定年は引退でなくあらたなる
夢に向ひて進み出づ時
大阪　岩城富子

御社の右近の橘小さき實に
田道間守（たじまもり）なるうた口ずさむ
東大阪　中山里江

花香る橘に我がふる里の
母を偲べり健やけくませ
神戸　鈴木敬子

温めて食べよと父の置き手紙
幼き頃の冬の食卓
大阪　松村龍太郎

電話機をにぎりしめてか手もとまで
子の喜びの合格の聲
京都　塩小路光孚

寒風に身をこはばらせ空見れば
白雲ちぎれ疾風（はやて）の如し
神戸　太田たか子

早朝に急變報す電話受け
胸騒ぎつつ老母（はは）の御許へ
大阪　中瀬央子

曾孫より元気ですかと息の良き
聲の弾みて電話ママへと
東京　小嶺利子

封書なく軍事葉書は束なせど
永久に還らず君學徒兵
神戸　松本美智子

やまなみにひときは高き白山の
雪のごと見ゆ初雪降りて
生駒　畑下晴代

朝毎にまづ伊吹嶺を仰ぐれど
今朝は寒々雲につつまる
岐阜　入江千鶴

他愛なき話に興じ笑ひつつ
友との電話つひ長くなる
大阪　西脇かつ

思ひ草集めて足らず取り出す
母が形見の南蠻煙管
大阪　広瀬宗石

天満天神研究会

◆第二一回天満天神研究会

一月二九日に、「太子信仰と天神信仰の比較史研究会」と共催し、以下の三発表を行いました。（出席二十四名）

①永原順子氏（当宮文化研究所研究員）
「天神信仰の古典芸能への影響」
能では、道真公と比叡山の法性坊僧正との関わりを中心に、天満大自在天神の誕生が描かれる。その他、天神ゆかりの社寺や土地、神仏が描かれた能もあり、天神信仰の広がりが見て取れる。文楽では、超人的な道真公の魅力が存分に描かれている。「菅原伝授」は、天神信仰を背景としつつ、文楽の多彩な演出方法によって、人気曲となったのである。

②郷司泰仁氏（大阪大学大院生）
「北野天満宮所蔵「北野社絵図」について」
京都・北野天満宮蔵「北野社絵図」では、上部に五つの円相があり、それぞれに五尊像（不動明王、一字金輪、薬師如来、愛染明王、慈恵大師良源）が描かれる。それぞれに特有の信仰を踏まえた上で、北野天神と五尊の信仰上の関わりを指摘。また、その傍らに描かれる星宿の種類や位置から、天神及び五尊における星辰信仰の重要性についてまとめた。

③鈴木幸人氏（北海道大学助教授）
「所謂「丁類（安楽寺本系）の詞書を持つ天神縁起絵巻について」
滋賀の草岡神社、京都の常照皇寺、それぞれが所蔵する天神縁起を、両本に特有の場面を中心に考察すると、両本は共通の祖本をもち、詞書は丁類（安楽寺本）とわかる。常照皇寺の天神信仰遺品の多くは北野社由来とされ、天神縁起もその一つであろうが、北野社が正統とする縁起は乙類である。草岡神社本天神縁起絵は、従来議論のある「北野社における縁起のあり方」を考察する上で重要なものとなろう。

◆第二二回天満天神研究会

六月一〇日に、「太子信仰と天神信仰の比較史研究会」と共催し、以下の二発表を行いました。（出席十三名）

④高島幸次氏（夙川学院短大教授）
「菅原道真信仰と天神御霊信仰
―渡唐天神伝説の背景―」
飛梅、渡唐天神の両伝説が、ともに北野天満宮を主要素とせずに、博多・太宰府を舞台とすることに着目し、北野天満宮の「北野御霊信仰」と、太宰府天満宮の「菅原道真信仰」の相克を背景に想定した。この両信仰には、それぞれ天台宗と臨済宗、山門派と寺門派、藤原氏と菅原氏、松と梅、などの複数の相克が絡み合い、大きな潮流をなしていたという、大胆な仮説が示された。

⑤武田佐知子氏（大阪外国語大学教授）
「『太子信仰と天神信仰の比較史的研究―信仰と表現の位相―』報告書について」
同研究は、文科省から平成十四年～十七年度の「科学研究費」を補助されたが、この度その報告書を提出した。十七本の論考を収録しているが、うち天神信仰関係は以下の、十本であった。
武田佐知子「太子信仰と天神信仰―序に代えて―」、高島幸次「太子信仰と天神信仰―真宗史の視点から―」、脇田晴子「北野聖廟和歌・連歌とその功徳」、竹居明男「越前国敦賀郡の天神信仰・序説―気比神宮とその周辺―」、松浦清「大阪天満宮所蔵の異色の束帯天神画像をめぐって」、稲城正己「菅原道真の詩文と仏教―差異の歴史学として―」、濱岡伸也「江戸時代金沢の天神信仰」、山田理恵「和歌聯句と渡唐天神像について―『後水尾院和歌千句を中心に』―」、山本五月「物語の再編―『北野天神縁起』から『天神の本地』へ―」、鈴木幸人「余呉・草岡神社伝来の北野天神縁起絵巻について」。

今年の「つくりもん」は「文房具の鳳凰」

大阪町人とつくりもん

江戸時代の大阪町人たちは、社寺の祭礼などの賑わい行事として、趣向を凝らした人形や、動物、静物を造りました。日常的な器物や食べ物などの風合いに着目して、それを意外な別物に見立てるのです。

これを「造り物」といい、大阪では、「つくりもん」と発音します。たとえば、陶器神社（中央区）の瀬戸物人形や、昨年が最後となった枚方パーク（枚方市）の菊人形も造り物の一種です。見物の人々は、そのアイデアの奇抜さに驚き、細工の巧妙さに感心したのです。

御伽衆とつくりもん

私たち天満天神御伽衆は、平成十四年（二〇〇二）の天神祭に、蜆の貝を藤の花に見立てた「しじみの藤棚」を造りました。同年が菅原道真公千百年祭にあたることから、江戸時代のアイデアを借用して、造り物を復活したのでした。

そして昨平成十七年（二〇〇五）には「乾物の猩々」を造りました。昆布を袴に、寒天を髪の毛に見立てるなど、これも江戸時代の大阪町人のアイデアでした。

そして今年は、造り物の第三弾として、「文房具の鳳凰」を造りました。これまでの藤棚・猩々のような、アイデアの借用ではなく、私たちの知恵を絞って制作したのです。

古くから、天満宮といえば「学問の神様」ですから、材料としては、文房具がふさわしい。そして、大阪天満宮表門の「十二支方位盤」は、道明寺の故事にちなんで、酉のところは鶏ではなく、鳳凰になっていることから、鳳凰を造ることになりました。そういえば、御鳳輦や鳳神輿をみても、鳳凰は天神祭と深い関わりを持っています。

鳳凰の色彩豊かな羽根は、「色鉛筆」や「カラーCD」で、華やかな尾羽根は色とりどりの「水引」で、独特の質感の脚は、賞状入れの円筒を利用しました。そして、頭はゼム……、いやいや、種明かしはこれくらいにして、ぜひ私たちの苦心の作を間近にご覧下さい。

人事任免

《退職》

平成十八年三月三十一日付

権禰宜　西野千尋

巫女　假谷真子

《新任》

平成十八年四月一日付

出仕　大橋弘邦（26歳）

出仕　齋木国保（22歳）

巫女　岡田莉奈（18歳）

巫女　林理恵（18歳）

大将軍社 燈籠一対奉納

去る三月、当宮の崇敬者である植西盛雄・隆子ご夫妻から、大将軍社に立派な青銅燈籠一対・春日吊燈籠一対を御寄進いただきました。

植西さんには、これまでにも、拝殿の吊燈籠や、境内四ヵ所の水銀灯、随身舎前の石柵など、数多くの御奉納を頂いています。

大将軍社の燈籠については、古く寛政八年（一七九六）六月四日に「石燈籠」を建てた記録がありますが、その後についてはよく判りません。

しかし、明治四四年（一九一一）九月三日、天神筋丁の清水吉右衛門が「青銅燈籠一対」を奉納した記録が残っていますから、このときに何らかの事情で、石から青銅に替えられたのでしょう。

この青銅燈籠の寄進に先だって、同年の一月九日には、大阪履物商組合の「履徳会」が、大将軍社に青銅狛犬一対を奉納している記録もありますが、ともに、戦争中に供出されたようです。

そこで、今回の御寄進が、実はかつての燈籠の復活にあたることを、植西さんにお話しましたところ、「毎朝の参拝の際に、なぜか、社頭が寂しい気がしましたので、寄進を思い立ったのです。過去にも燈籠があったことは初めて知りました。だから寂しい感じがしたのですね。かつての姿を再現できたとは、嬉しい限りです。」と話しておられました。

編集後記

◆「屏風に描かれた大阪天満宮」の特集は如何でしたか。実は、以前から「天満のランドマーク」としての当宮の描かれ方に興味を持っていたのですが、ようやく特集できました。掲載を快諾いただきました大阪城天守閣・湯木美術館・サントリー美術館に御礼を申し上げます。

もちろん、今回ご紹介した三点だけではなく、ほかにも当宮を描いた屏風は少なくありません。次の機会を持ちたいと思います。

◆いよいよ上方落語定席「天満天神繁昌亭」は、この九月十五日にオープンすることになり、七月初旬には、工事用の板塀も撤去され、建物の全貌が現れました。天神祭に参詣される一〇〇万の群衆は、北門を出た途端に、昨年までの駐車場とは全く異なった光景に驚かれることでしょう。

◆九月一五～二四日の「こけらおとし公演」の番組表が届きました。桂米朝・桂春團治・露の五郎兵衛さんら大御所に加え、笑福亭仁鶴・桂三枝・桂ざこばさんらの人気者など、錚々たる顔ぶれです。さらに、東京からも、三遊亭圓歌・桂歌丸・春風亭小朝さんらが来演されるという豪華版です。

繁昌亭でお楽しみの前後には、ぜひ当宮にご参拝ください。

大阪天満宮社報
てんまてんじん 第50号
平成18年7月20日印刷
平成18年7月25日発行
発行人　寺井種伯
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041　大阪市北区天神橋2-1-8
TEL　06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社